（様式１・Word）

[成果情報名]早期のデビークは羽毛つつき被害を減少させる傾向がある

[要約]熊野地鶏において３日齢デビークは、慣行の７日齢デビークと比較して、鶏のつつき習性の発現を抑制する可能性があり、出荷時までのつつきによる死亡率および歩留まり低下を招く羽毛損耗度３割以上の個体を減少させる傾向がある。

[キーワード]熊野地鶏、羽毛つつき被害、デビーク時期

[担当]三重畜研・中小家畜研究課

[代表連絡先]電話 0598-42-2207　　E-mail：ooyak01@pref.mie.lg.jp

[区分]関東東海北陸農業・畜産草地（中小家畜）

[分類]技術・参考

[背景・ねらい]

三重県のブランド肉用鶏である熊野地鶏は、開発・普及当初から鶏同士の闘争・つつき行動によって、出荷前に良好な個体が創傷したり、最悪の場合は死亡するケースがあり、生産性を阻害する事象が起きている。この問題に対し、地鶏生産農場では、従来からデビークが実施されているが、その適切な実施時期については検討されてこなかった。そこで、本試験ではデビーク時期の違いが羽毛つつき被害減少に及ぼす影響について検討した。

[成果の内容・特徴]

１．デビーク時期を３日齢、５日齢、７日齢（慣行）、10 日齢としたところ、つつきによる死亡率は、７日齢（慣行）に比べ、５日齢と 10 日齢で増加するが、３日齢で減少する傾向がある（表１）。

２．出荷時まで生存している個体でも、創傷によってモモ肉の歩留まり率の低下を招く羽毛損耗度３割以上の個体は、７日齢（慣行）と比べ、３日齢、５日齢、１０日齢で減少する傾向がある（図１、図２）。

３．上記のつつきによる死亡率および羽毛損耗度の調査結果から、３日齢デビークは、慣行の７日齢デビークに比べ、羽毛つつき被害を減少させる傾向がある。

４．デビーク時期の違いは、鶏の増体に影響を与える可能性が考えられたが、出荷間際の体重への有意な影響は見られない（表１）。

[成果の活用面・留意点]

１．熊野地鶏生産者へ情報共有し、羽毛つつき被害低減につながる飼養管理を推進する。

２．本成果は、夏季に行った試験であり、冬季において同様とは限らない。

［具体的データ］

表１．飼養成績

	デビーク時期	112日齢体重 (kg)	平均気温 (℃)	最高気温 (℃)	平均湿度 (%)	つつきによる死亡率 (%)
極短縮区	3日齢	2.81 ± 0.3	26.2	28.9	82.8	3.4
短縮区	5日齢	2.81 ± 0.3	－	－	－	7.4
対照区	7日齢	2.85 ± 0.3	26.2	29.5	82.4	4.6
遅延区	10日齢	2.78 ± 0.3	26.3	29.6	82.8	10.3

※平均値±標準偏差。供試羽数各区 175 羽。

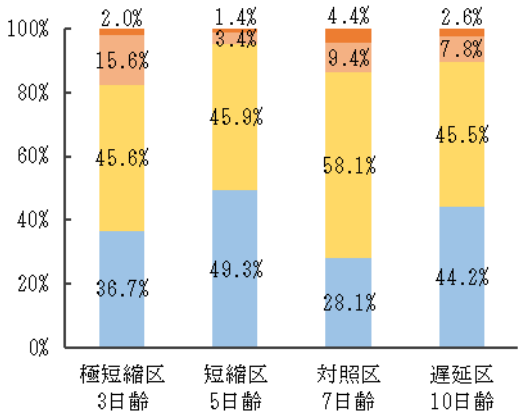

図１．112 日齢の羽毛損耗度の割合

図２．羽毛損耗度の指標

※羽毛損耗度 0:損耗度 1 割未満、羽毛損耗度 1:損耗度 1～2 割、羽毛損耗度 2:損耗度 2～3 割、羽毛損耗度 3:損耗度 3 割以上

（大矢康成）

［その他］

研究課題名：羽毛つつき行動特性解明による地鶏の飼養管理技術の向上
予算区分　：県単
研究期間　：2019-2021 年度
研究担当者：大矢康成、松本真人、黒田克利
発表論文等：なし